藤野厳九郎の蘭学の系譜と生地

泉　彪之助

日本医史学雑誌第二十九巻四号
昭和五十八年十月三十日発行　昭和五十八年六月二十七日受付

魯迅の小説「藤野先生」の主人公であり、魯迅の仙台医学専門学校在学中の師であった藤野厳九郎は、その祖父および父が蘭学を学んだことが知られている。

このことは従来から記載されていたが、その意義について深く検討した論考はなかった。著者は、小説「藤野先生」の背景分析に従事中、これが無視することの出来ない重要性を含んでいることを信ずるようになった。

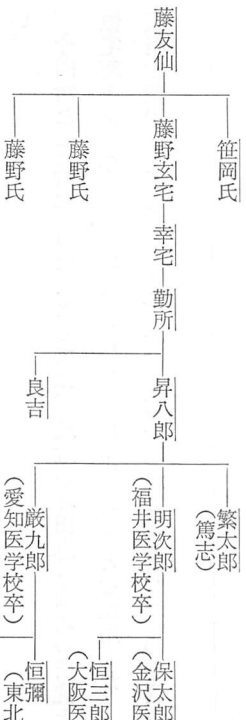
ここでは、今までの記載を整理して、事実を系統的に記述すると共に、その意義について、著者の考えを述べてみたい。

今回新たに使用する史料としては、最近の坪田忠兵衛氏の研究と、関係者には知られていたが、未公開であった「藤野恒宅家系譜」（藤野邦夫氏の好意による。以下家系譜）とを使用した。この家系譜は戦後作成されたものであるが、他の一次史料を使用しているらしく、かなり古い記述と思われるものを含み、家伝を整理したものとして重要な史料である。

(1)　藤野家の家系と、藤野厳九郎の出生地について

「福井県医学史」の指摘するように、藤野家については、「坂井郡誌」その他の史料に記載がなく、家伝による他はない。家系譜と従来の記載とから構成した藤野家の系図を、表1にかかげた。

表1　藤野家系図



藤野家は、徳川時代の初期に越前国下番村（現、福井県芦原町下番）に定住したと伝えられ、初代の藤友仙（幽僊）は、曲直瀬道三に師事したともいわれる。以後、代々医を業とした。二代玄宅については、家系譜には医業について明白な記載がないが、恐らく医師であったと思われる。また、友仙の長子は、笹岡家を起こし、笹岡家も代々医を業とした。

従来、厳九郎の出身地について、厳九郎成人後の行政区劃に従って、福井県坂井郡本荘村下番（現、芦原町下番）とされて来た。そのことは決して誤りではないが、これから出生地をも、右のように記載した文献があり、出生時、明治七年の行政区劃を考えるならば次のように訂正されなければならないと著者は考える。

藤野厳九郎の出生地を正確に、「坂井郡下番村に出生」とした最初の記載は、芦原町下番に建てられた藤野厳九郎碑の碑銘であった。著者はこの碑銘に示唆を得て調査した所、「藤野厳九郎は、敦賀県（現、福井県）坂井郡下番村（本荘村下番を経て、現、芦原町下番）に出生」とすべきであると知った。

厳密にいうならば、当時は法的には、郡村制によらず、大小区制によっており、「敦賀県第十四大区七小区一組で出生」としなければならないが、大小区制は、明治四年から明治十一年までの過渡的な制度に過ぎず、「芦原町史」その他の関連文献も、郡村制と大小区制と併記しているので、右のように記述することは誤りではないと考える。

(2) 下番の歴史

著者が、過去の行政区劃にこだわるのは、下番という地名が、本荘村よりも遙かに古い起源を有するからである（表2）。

表1の2　藤野家家系人名表

家系譜の記載	藤友仙（1658—1738） 幽僊 万治元年— 元文三年	藤野玄宅 1799卒 寛政十一年卒	幸宅（1749—1819） 文政二年卒 七十六歳	勤所（1795—1839） 通称　岩二郎 字　深蔵 勤所　敬所 尚斎　正斎 天保十年卒 四十五歳
家系譜の記載	昇八郎（1822—1882） 通称　恒宅 字　春風 子山　容闇 幼名　昇八郎 明治十五年卒 六十歳	良吉	繁太郎（1858—1883） 通称　篤志 明治十六年卒 二十五歳	明次郎（1862—1919） 通称　恒宅 幼名　明次郎 大正八年卒 五十八歳
他文献の記載	容庵			明二郎

元来、下番は、興福寺および春日神社荘園、河口庄の一部であった。この地方は、郡評制の下でも坂井郡と呼ばれた地域であったが、後に荘園の発達と共に、多くの部分が、東大寺を始めとする寺社の荘園となった。

河口庄の起源は正確には不明であるが、興福寺の衆徒は、康和二年の白河法皇の院宣を寺有の根拠としていた。河口庄は、本庄、新庄等、十郷から成り、本庄は、上番、中番、下番の三つに分かれていた。番とは、荘園領主に夫役を奉仕する際の、地域単位である。慶長期ごろまで、郷が地域の呼称単位として用いられた時期があり、「本庄の郷下番村百姓中」などの用例がみられる。

徳川時代には、下番は最初天領であったが、後に福井藩が天領預りにあたり、文政三年福井藩領とな

った。これより先、寛文九年に近世的な意味における坂井郡が成立している。

表2からも知られるように、明治の初期、現在の福井県にあたる地域の行政区劃は、猫の目のように変転し、一時は福井県を分割して、石川・滋賀の両県に編入してしまった程であった。厳九郎出生の明治七年には、現在の福井県の全域が、敦賀県と呼ばれていた。現在の福井県が設置されたのは、明治十四年（一八八一年）のことであり、福井県令第十九号によって、下番村ほか十九箇村が統合され、本荘村となったのは、明治二十二年（一八八九年）であった。厳九郎十四歳の時にあたる。

また、河口庄本庄は本庄と書くが、本荘村の設置には、本荘の字が用いられた。その理由は不明である。後に述べる藤野昇八郎の適塾姓名録における出身地は、本城となっているが、由来から見ても明らかに誤りで、聞き書きによるものであろう。本蔵と書いた文献もあるが、これも正しくなく、恐らく草書体が類似しているための誤りと思われる。（芦原町長斉藤五郎右ェ門氏の示唆による）

ちなみに、中国で出版された魯迅伝の中には、本蔵村出身としてあるものが散見されるが、日中両国を通じての最初の魯迅伝である、小田嶽夫氏の「魯迅の生涯」が、本蔵村出身としているため、それによったものであろう。もっとも最近ではこの誤りが知られ、出身地の詳記を避けて、ただ福井県人としている魯迅伝が増してきているようである。

(3) 藤野勤所

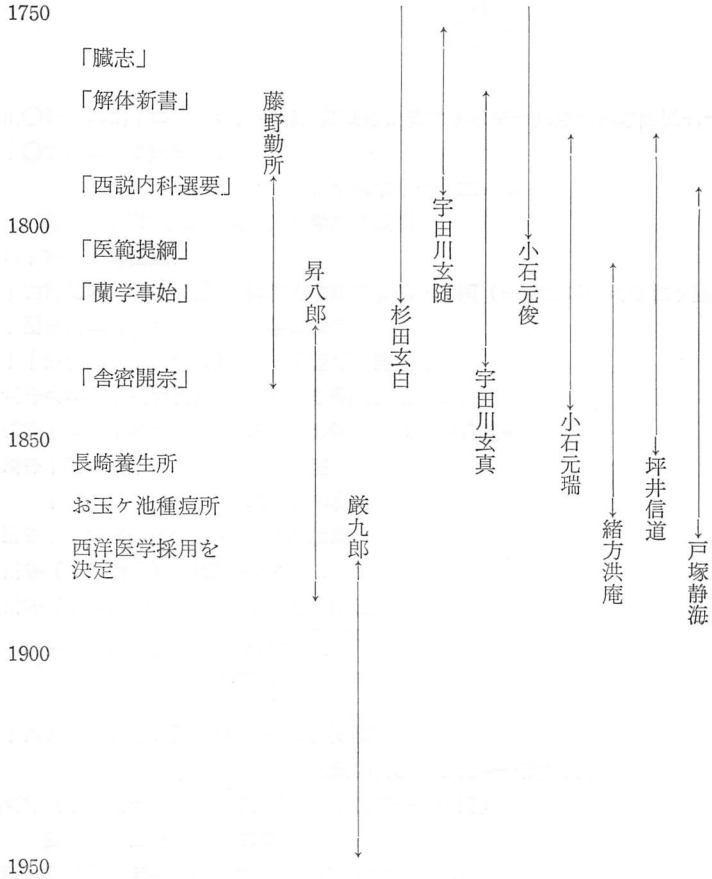
厳九郎の祖父勤所は、宇田川玄真に師事した。厳九郎側の史料では、勤所が玄真の下で学んだ期間は不明である。また、勤所は、玄真の下で学ぶ間に坪井信道と親交を結んだと伝えられる。後述のように、勤所の長男、昇八郎は、適塾に学ぶが、その一つの理由は、この坪井信道との因縁によるものであろう。

従来、勤所の晩年については、「藤野先生小伝」によって、他国で苦学中に病気になり、帰郷死去したとされていたが、

表2　下番の歴史（「芦原町史」による）

天平三年（七三一）「越前国正税帳」　坂井郡
一〇世紀前半「和名抄」　川口郷
康和年中？　興福寺領荘園　河口庄
延慶二年（一三〇九）「春日明神験記絵詞」　春日神社荘園　河口庄
　河口庄　本庄、新庄、新郷、大口、兵庫、荒居、王見、関、溝江、細呂宜
　本　庄　中番、上番、下番（番とは庄園領主に夫役を勤仕する単位）
慶長期までは郷が地域単位としての性格を有していた
　例　本庄の郷　下番村百姓中
寛文九年（一六六九）　坂井郡の成立（一二郡→八郡）
　（坂北郡、坂南郡→坂井郡）
元禄一五年（一七〇二）　上番、中番、下番
　公　料
文化一三年（一八一六）　公料預所　福井藩領
文政三年（一八二〇）　公料預所
明治三年（一八七〇）　本保県設置
　四年一一月（一八七一）　福井県設置
　一二月　足羽県と改名
　五年一〇月（一八七二）　大小区制
　六年一月（一八七三）　足羽県の廃止、敦賀県に編入
　九年八月（一八七六）　敦賀県の廃止、石川県に編入
　一一年七月（一八七八）　大小区制から郡制へ
　一四年二月（一八八一）　福井県置県
　一七年四月（一八八四）　町村連合戸長役場を設置（下番村ほか八か村を連合）
　二一年　町村制制定
　二二年　（福井県令第一九号）本荘村の成立
　　下番を含む一九か村より
昭和一〇年二月　芦原町成立
　三〇年三月三一日　本荘、北潟、芦原の三町村を合併して新しく芦原町とした

表 3　蘭学史上の重要事項と藤野家三代及び蘭学者の生年



家系譜によれば、京都で開業し、高名を博していたが病気になり、帰郷して死去したとなっている。最近の文献に同様な記述が見られるのは、恐らく家系譜あるいは同系統の史料によるものであろう。勤所の没年は、天保十年（一八三九年）であった。

表3に示すように、勤所の生年は、蘭学史における重要な出来事と重なっており、勤所が蘭学のいわば黄金時代を生きたことが知られる。

(4)　藤野昇八郎および藤野良吉

勤所には、二人の男子があり、長男昇八郎が厳九郎の父で

ある。当時福井では、橋本左内の父長綱が、華岡青洲に学んだ蘭方外科医として評判が高かったが、勤所の次男良吉はこの長綱の下に学び、昇八郎は京都へ出て小石元瑞に師事、一旦帰郷の後、弘化三年（一八四六年）適塾に入塾した。入塾の年は大村益次郎と同年であり、適塾姓名録の記載順位は八四番であった。昇八郎の正式な記名が、昇八郎か升八郎か、従来議論のある所である。適塾姓名録は、前越本城藤野升八郎となっているが、前に述べたように、この姓名録は聞き書きによって作成された可能性があり、必ずしも信頼出来ないと思われる。その他の史料を参照しても、最終的には決定出来なかった。（家系譜は昇八郎としているが、家系譜が戦後に作成されたものであることと、疑問のある人名を、しばしば並列表記していることから、基本的史料とはなし得なかった。しかし升八郎説の最大の根拠は、適塾姓名録である所から、昇八郎である可能性が大きいと思われる）。

なお、適塾入塾は、勤所の没後七年目のことであり、小石塾退塾から適塾入塾まで多少の期間があるとしても、小石塾入塾のころには、すでに勤所は死去していたものと推定され、昇八郎は越前から改めて上洛したものであろう。元瑞から紹介者の橋本長綱にあてて、昇八郎の入塾を承知したと書き送った書簡が残っている。

昇八郎は時勢に動かされ、上京して佐久間象山に砲術を習おうとしたが、戸塚静海に説得されて思いとどまったと伝えられる。この戸塚静海との関係も、勤所の交友範囲から当然のものとして想像されよう。

「藤野先生小伝」によれば、一八四九年、笠原白翁により痘苗が福井にもたらされた時、昇八郎は分苗されたものを率先して使用し、全身に発痘させてしまって、困惑したという。

適塾塾頭、伊藤慎蔵が大野藩の招きで福井に来たのは、一八五五年のことであるが、昇八郎はこの伊藤慎蔵とも交友を結んだ。

家系譜には、昇八郎の弟良吉は生涯独身で嗣子がなかったため、厳九郎がその後を継いだと書かれている。坪田忠兵衛氏によれば、厳九郎は、幼時母の実家大石家に養子入籍し、後離縁しているが、この両者の関連は明らかでない。

著者はこの大石家への入籍を、坪田氏の考察に従って、最初は学籍上の必要からかと考えたが、その後の検討で、徴兵制対策ではないかと考えるに至った。詳細は次の機会を待ちたい。

直接蘭学との関係はないが、厳九郎の長兄繁太郎、次兄明次郎も医師であり、繁太郎の学歴は不明であるが、明次郎は、福井医学校の卒業生であった。

考　察

中国の作家・思想家であり、新民主主義革命の思想的骨格を打ち立てたとされる魯迅は、日本に留学して仙台医学専門学校に学び、解剖学教師藤野厳九郎によって生涯変らない大きな影響を受けた。このことは、魯迅の小説「藤野先生」を始めとして、多くの魯迅関連文献から知られる通りである。

この出会いは、医学生と医学教師という出会いであったのにもかかわらず、魯迅が間もなく医学から文学に転向したこと、魯迅が藤野厳九郎から受けた感動が直接医学的なものでなかったことから、医史学的観点を含めてこの出会いを見ようとする企ては、調査報告「仙台における魯迅の記録」を除くと、極めて乏しい。

著者は、この点に不満を持ち、医史学的観点を含めた魯迅研究を志してきたが、今回はその一環として、藤野厳九郎の家系における蘭学の系譜を検討した。

厳九郎の家系における蘭学の伝統は、次の点で厳九郎に影響したと思われる。

一つは、厳九郎が解剖学を専攻したことに、蘭学の影響を見たい。専門の選択には多くの要因があり、また、蘭学すなわち解剖学と、単純に割り切れないことはいうまでもない。しかし、解体新書以来の、蘭学における解剖学の比重、とくに「医範提綱」の著者である宇田川玄真の塾に、祖父勤所が学んだことが、厳九郎に微妙な形で影響を及ぼしたと想像することは、必ずしも不当ではないであろう。（父昇八郎の師、小石元瑞の父である元俊も、解剖学に多大の関心を持っており、こ

の方面からの影響も想像されるが、小石元瑞については史料が充分入手出来ず、断定を避けたい。）

第二の問題は、厳九郎は、蘭学の影響が大きかったために、オランダ医学からドイツ医学へという転換に充分適応し切れず、福井県の田舎の一開業医という、後半生の比較的不遇な生活につながったのではないかということである。この点に関しては、厳九郎の個人的な事情による学歴の影響がもっとも大きいが、詳細は次回に考察することとしたい。

中国は、世界でも有数の長い文化的伝統を有する国であるが、その伝統がかえって重荷となって、十九世紀に初めて接触した、新しい西欧文化をとり入れることに遅れをとった。そのことが、最初に強く意識されたのは、阿片戦争後の洋務運動であった。

魯迅は、洋務運動によって設立された教育機関の一つ、南京の鉱路学堂に学び、そこでヨーロッパの新しい文化に眼を開かれ、反伝統の立場に立って西欧文化を学ぼうとした。当時の中国にとって日本は、西欧文化へのもっとも手近な窓口であり、清国政府は毎年日本へ留学生を送り出しており、魯迅もその一員に選ばれて日本に留学した。魯迅の日本留学期間は、三つの時期に分けられる。第一期は、弘文学院における日本語習得の時期であり、第二期は、仙台医学専門学校における医学を学んだ時期（中国でいう仙台学医）であり、第三期が東京における文学研究の時期である。この第二期はもっとも短期間であったにもかかわらず、魯迅自身の直接的な回想が、作品「藤野先生」として残っていること、魯迅が、いわゆる幻燈事件その他を契機として、青年時代初期の素朴な科学信仰から離れて、思想家としての第一歩を踏み出したことから、日本留学期間の中で、もっとも重視されている時期である。しかしながら、医学から文学への転向が重視されるあまりに、医学を学習しようとした魯迅の中にあった内的、外的な必然性、前記の転向にもかかわらず、魯迅の中に継続して存在した反伝統の立場、科学あるいは合理性の重視という側面が、無視されてきたきらいがある。

著者は、後に転向することになったにせよ、医学を学ぼうとした魯迅の中にあったものを追究することが、魯迅におけ

る反伝統の姿勢、中国の社会と人間性の中にある矛盾に対する批判、を理解する重要な手がかりになると考えてきた。そのために、魯迅と藤野厳九郎との出会いを、医史学的な観点から詳細に追究することが、魯迅の思想を理解するための、一つの立場となり得ると考えた。

実証的な立場からする魯迅研究は、すでに詳細に行われているが、医史学的観点からすれば、まだ充分とはいい難い。また、藤野厳九郎については、なお検索すべき分野が多数残されている。今回は、その一段階として、厳九郎の家系における蘭学の伝統を対象とした。

一般にはあまり知られていないが、現代中国医学は、成立の過程でかなり日本医学の影響を受けている。医学用語はその一つの例で、宇田川玄真が創案した腺、膣、膵の内、膵を除く他の二つは、現在中国でも用いられている。(王立達は、漢字の字形と語義を日本人が創造したものを中国で援用している例の一つとして、膣を挙げているが、実際には、陰道という言葉が用いられることが多いようである)。このような点から見ると、思想史的な意義を離れて、魯迅と藤野厳九郎の出会いは、日中医学交流の一つの出来事としても理解し得ることを強調したい。

魯迅は「吶喊自序」の中で、医学を志した動機として、父親の病気と、日本の明治維新が西洋医学の輸入に導かれたという知識とを挙げている。魯迅はそのことを意識せず、また従来指摘されたことがなかったが、はからずもその蘭学の伝統を色濃く持った教師によって、生涯変らない大きな影響を受けたのであった。

種々御援助をいただいた藤野邦夫氏、坪田忠兵衛氏、斎藤五郎右ェ門氏に謝意を表する。

(本論文の要旨は、昭和五八年五月、第八四回日本医史学会総会において発表した)

文献

(1) 魯迅文集 第一・二巻 竹内好訳 一九七六年 筑摩書房

(2) 仙台における魯迅の記録を調べる会編　仙台における魯迅の記録　一九七八年　平凡社
(3) 小田嶽夫　魯迅の生涯　鎌倉文庫　一九四九年。同　范泉訳　一九七八年　爾雅社
(4) 藤野恒宅家系譜
(5) 藤野恒道　藤野先生小伝　中国文学報　第四冊
(6) 坪田忠兵衛　郷土の藤野厳九郎先生　藤野厳九郎先生顕彰会　一九八一年
(7) 藤野恒三郎　学悦の人　藤野博士退官記念会　一九七〇年
(8) 泉彪之助　師弟愛は海を越えて—魯迅と藤野先生—　福井新聞　昭和五六年十二月二一日—五七年二月九日
(9) 斉藤槻堂　蘭医藤野昇八郎とその一族　若越郷土研究　十二巻一号　昭和四二年
(10) 芦原町史　芦原町　一九七三年
(11) 坂井郡誌　坂井郡教育会　明治四五年
(12) 新考坂井郡誌　坂井郡社会科研究会　一九七七年
(13) 福井県史　第三冊第三編
(14) 福井県医学史　福井県医師会　一九六八年
(15) 富士川遊　日本医学史綱要2　東洋文庫
(16) 宇田川玄真　西説医範提綱　青史社　一九八一年
(17) 北沢正誠ほか編　蘭学者伝記資料　青史社　一九八〇年
(18) 赤木昭夫　蘭学の時代　中公新書
(19) 山本四郎　小石元俊　吉川弘文館　一九六七年
(20) 伴忠康　適塾をめぐる人々　創元社　一九七九年
(21) 天野俊也　伊藤慎蔵と大野藩　若越郷土研究　十四巻六号　昭和四五年
(22) 岩治勇一　大野藩洋学館の沿革　若越郷土研究　八巻二号　昭和三八年
(23) 王立達　現代漢語中従日本借来的語彙　中国語文　総第六八期。さねとう　けいしゅう　増補中国人日本留学史　くろしお出版　一九八一年　より引用

（福井県立短期大学　第一看護学科）

Dr. Genkuro Fujino in the Lineage of Western Study by the Dutch Language (Ran-Gaku)

by

Hyonosuke IZUMI

Dr. Genkuro Fujino, Luxun's teacher for anatomy at Sendai Medical College, is known to have had direct ancestors who studied Western medicine through the Dutch language. The details of the ancestry and their influence on Dr. Fujino are reviewed and discussed.

1. Genkuro's grand-father, Kinjo, learned Dutch medicine from Genshin Udagawa, the author of "Ihan Teikoh", a famous book for applied clinical anatomy. Its influence may have been a part of Genkuro's motive to study anatomy.

2. Genkuro's father, Shoh-hachiro, studied Dutch medicine under Genzui Koishi in Kyoto and later at Koh-an Ogata's "Tekijuku" in Osaka.

3. Dr. Genkuro Fujino resigned from professorship in Sendai and returned to his native village to spend the latter half of his life in practicing medicine. In the changing stream of Japanese medicine from Dutch influence to the German one, the tradition of Dutch medicine in him may have acted rather as a burden to Dr. Genkuro Fujino.